



生きづらさを感じている子どもは今も昔も

東海大学医学部総合診療学系小児科学教授 山田佳之

消化管のアレルギー疾患を専門としているため、慢性的な消化器症状を訴えるお子さんを診る機会が増えました。消化管アレルギーの詳細は別の機会にご説明しますが、このような診療を行っている中、不定愁訴を訴える患者さんがたくさん受診されます。その中に、学校に上手く適応できなかつたり、他人と上手く付き合えなかつたりする方が少なからずおられます。このような患者さんが増えたのは本当に最近のことなのでしょうか。コロナ禍でさらに増えたとは思いますが、今、思うと私が子どもの頃のクラスメイトにも、給食の肉が食べられず、廊下に出されて無言で肉を見つめて座っていた子、毎日、忘れ物をし、皆の前で罰を受けても、忘れ物癖が治らない子、誰が声をかけても全く返事をしない子、ドラえもんに出てくるような現実にはない話を現実のこの様にとらえて困惑する子など、社会で生きづらさを感じているのではないかと思われる子がたくさんいました。最近では発達障害がスクリーニングされるようになり、医療的な問題として扱われる機会が増えました。適応していくのには皆と同じことが出来る必要があるかもしれませんが、そのことが大事かどうかの議論は別な気がします。じっとしてられない児がある学校の卒業式で長時間、会場に座っていて、終わってから、先生に褒められているのを見かけたことがあります。頑張ったことを、褒められて嬉しそうでしたが、この努力がこの児にとって本当に必要だったのかと考えると、私は素直には、そう思えませんでした。医師からお話すると、多くの患者さんや保護者の方は非常に真剣に受け止めて下さいます。ミスリードしたのではないかと心配になることもしばしばありますが、実は答えはすぐには出ません。このような患者さんにとっての最善が何かを考えることはとても難しいと、キャリアを重ねて、より一層、感じています。

